六家集

拾三

和書門 類 二八三七 號 七六 函 八 架

内閣文庫 和 二八三七 類 號 二八 冊 二〇 函 一七 架

内閣文庫
番號 和 28137
冊數 18 (5)
函號 201 528

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館 National Archives of Japan

大日本帝國圖書印
日本政府圖書
明治十五年購求

けふさくは花をあすよとまたれしハむかしそけにもなかめし我そかれ

郭公十首

まちくやと卯の花さかりすきぬれはまたせすなかん山郭公
郭公神なひ山のやまのはにまつこそ人のとふらんとする
時をまつ里にも君かこゑきかは人の心いかゝあるらん
なく声のたえまの月にしのひにそ時をうらみて夜はの一声
郭公一声なきて過ぬれはなこりをしたふ行かたもなし
待わひつゝ聲をやきかんほとゝきすなかぬ山郭公さへあらはこそ
山里はいつもとはれぬ郭公待とはなしに声のきこゆる
郭公なれもなく音にはなかねともゆふくれかたの関
夕月夜の山のはにかゝれは郭公なくさめかたき山の端もなし
めくりあはんひとこゑ郭公なかすのこゑそ聞えねはせん

拾玉集巻第一

百首和謌

花十首

山たかき嵐乃桜の花なれは梯の里は雪そ降りける
とまるへき風のしからみかけよかし花なかれゆくわたる人
山桜咲らんのちハ春霞花の本をはへたてゝそ見ん
さりとものおもひみよしの花の梢ちらしぬ指と
山桜みちをつけてそたつぬるも深き里よりゆきかせん人
人ことにひとつ間しや桜かな散と惜まぬ心ありやと
むかし人は今の人をおもひみて八重さくら春にくらされ
春くれは桜かすくわくれてしりの山高きより日をゝくらす
春風ハよそにつなけひさくてそよさくもしらしとハしみえん

月十首

大井川ゐせき月ハ名のいはをこえてとくる山もやいはひ松かん
こやの池よらん月の光われハ芦の下葉に風寒く氷そ
かりくまいやまさに秋の月みれハ浪まにそ月はてらし
山の紅にはえん清見かた浪間に月ハつれなき
あすかりくいはのまかなき涼しハわかみのをちこちの月の光
山さとは松八条るる紅の枕さしへ月のおちかたの
中々よりわくる月のさやけさハそてき木陰よりもにかへり
秋の月さしのまよのおもいれに紅にあふてへてまた人
宮のかれかたうかれ月のこえかたよりもある
清見かた月すむ夜すハ霜の枝の絶の糸もかりて

雪十首

七絹のし庭にふれは雪梅かそ色めきて
雪ふる人のひこぬさそてたちなをし山への里
雪ふれはまつ人もなくわか山かつ人枝の村里
わか浦や雪ふる山路の志賀とみれハ梢なり
志賀のうら沖つ風ふきさえまさるハひかりの雪の宿
限りしそ雪ふりけん庭田のつもるさへ氷
かつらわかみそみつ流そ雪ふる雪の
わかやまのひさしへこころつけよ雪もよ
夫の浦さわけぬまたはわか梅のいつくん庭の
あかむのまハつけ松につもりの庭の白雪

恋十首

いまそとつ川のなかとりて人めつつまし

こまみ山につれなきありしわかれまてお坂山ハゆめぬ日そ
美すまてよきみえし山科の山の宿からくも
いかにとしてものあれとかなし人の井にや山の御ハ心かへ
流れかみ乃にもつきにゆめの山への御をそてに地とふことの
あれ秋につもりとはまた人かへる袖とにしてよ
わすられぬ何にしかへしおなし世のむかしのうきそこにあり
命こそ逢ふ人のうきわすれ逢ふこゝのあはれ
つれなき根にそしき逢ふあはれの思ひのあはれ
むかし世よ雨のうきかなしきおもひ露のうき

旅十首

行の国わけの山のやまと雨の夜ハうつゝ花にも夢の
露さ秋の野原と袖のゆめにそ袖の露ちりかゝる

こしかたまつ千種ハ露のさまも深きしらむもの上に
あらしたくそこにまみえて雲の旅路の方ハ空よりそ
旅乃よりの旅寝の夜やまた旅の日にさすかの袖とあつる
ともすれハ故郷の雨そ思ひしに秋をこひ都の人ハおもはる
秋のことさらにうつる人やすの有明よそに逢ふわかれと
仲津風をあはれと思ふかな故郷の人まつそなきや人
都の秋こそ夜まてる旅の袖ともにたのむや人のみやこ人

まことなりけり何とせん千世に松いつとなき代の行すゑも

祝十首

いよのこと梅かえに人よおもしろくん君かよのちよとかきりなく
君か代をちよとかぎりつゝ八千代の井つ濱の真砂に松かね
をさまる花咲枕の君か代なるらんとしへ千とせ百年

住吉の松の聲と君か代と何れ久しき神に問はや
たか山に嵐もしらぬ月影は君かよはひと照らせや
まつらしん川瀬の水と君か代の何れまさると此根誰
いつくしき此神は常に此君か千年栄ふるしるしあらく
君か代の久しかるへきためしには名のみのこれる高砂
あしかきのなかれ久しや代々かかるともろひと君に給へき
たとへつる雲にも世にかかりつつ君かの光りくもらさる

述懐十首

いたつらに過し来にける年月を今更思ふ身をいかにせん
後の世の願ひを深く祈りすくすみを此浦なれと思ふ
名ははかそいつもまつらくきしとこそ今はつけて神もそむかれ
行末とそ今日そ世中は知らぬ憂ぬへき心の中

こゝろへてうき世中は根なし草ひとつの露の頼み久しき
なけかしな富も栄ふる世のさまは何れも消ゆる人なれはこそ
いかなる人も月日は過くし行きなから暮るゝ年の名のみ残さん
世中は何をかなくは知らす今はのきはの心あさなる
惜しからぬ我身の程の名残をは何と思ふもおもひすてゝ
入日さす西にむかひつる我は暮れ行く年に借りぬる

無常十首

あはれむかしふりにし跡を訪ねてもかはらぬ物は哀れなれ
くらかりし世に何事もおもひあはせて思ひとけなくは
はかなくも世中の今日のうちにかはりゆく中そ哀れなり
世中は何の影に見えつつ消えし消えては
夕暮れの露に見えて名残はあさきこゝろは

水の面にうつれる月のかけ[illegible]
[illegible]

釈教十首

[illegible]

当初為悼習始不詠之百首也末入其境
在道之

百首和謌

述懐

[illegible]

いふこゝろのみちあかなをもてむすびけるさき歌なり
家の女のひとりおもひ世をわびて兵部卿のこゝろをおもひて
まさりけるこれより山里のさびしさ人にしられぬ
秋の夜のあはれの歌にして[illegible]のかきとこそあらめ
人のこゝろ世の中の人にもよそにこゝろのかゝれるものなり
住山のさびしき所にのがれて[illegible]ゆく[illegible]とへと
さりとはやせんかたなきことわりのひとりしられぬ歌の[illegible]
まことのやまのそらなきならぬ世をわびて[illegible]ば
すこし人は郭公のこゑのきゝわかれずして人もみるまで
このはるの人のこゝろの二ことにひとり人のあはれをしらん
は世にけ世をしりまことにひく人のかなしめらるゝ
よのなかのあはれにこゝろのあるよしこゝろのしけれ
ねさめのあかつきのこゝろをおもひて歌かきたる心の風
のくさのつゆはとかく人のこゝろをおもひつゝけて歌人
世の中はとてもかくてもおなじことゝいふ人のいひし
かなしみのあはれのつゆのむすぼほれて世にもはかなき
何ゆゑかなしみをもとめけん歌はいまのこゝろのうち
なにそ人のやまの山への住居にひとりあかしくらす
所なくさめのたよりなきまゝにこゝろのうちに春
人のこゝろのうきをも歌によみてつれ/\なるこゝろ
世のなかはうきものゝあはれなるかなとおもひいる
世の中のならひとて人のあはれもおもひしらで
秋の夜のおもひの月のひかりのあはれさやけさ
夜はふけてやまのはにかゝりぬるまでながめしの
月

こゝろざしはたゞ仏神をたのむせかいにみえおほつかなし御むかへ
執ねんふかきのうへに用意仏のうちやすらんとすゝめ
めされよふかくねがひ入事ハ念仏三昧のさとりハ菩提のいたる
浄土之門の秘ハいはゆるより聖衆のむかへの人めぐさきあれ
ありのまゝハ極楽をもやわらげ信心に花の池にかはりあれ
世ふかき人のまはりの山寺まへうつくしうつる心なる
錦みしかき表具用心のさそひて花のもとやすむ色ぬる
は世に物あまねくさとりよりそむくにもかはりしへやうらん
うき世にハちりまとはしてことゞとせしいかゞはせんとは
ことわりハさらぬ事にて思ひていづくにまかせくへ
今ハさいせひとつ乳き若きやさし人ぞ常にいとそへる此
ゆけ人念仏のことはのこゝろはやむ事なく人のまもり

とふてしめくおもひ六ハ秋のよしむしのねとあはれに
脈あはれあまたの人のこゝろさしハ世をすてゝこれは法さし
くらわせん今の身をいとさてとしりやハしやよりもとゝろ
ゆきらはなやうすて哉ゆきのたまにはひとつまり世はん
人をもよりのとゝのさひつゝゆくにぬるハつゆのなかにくわ
ねかすまつりのよし人ハぬのこまひきはちとそ道
ろかりえ今なりてみしおもひつゝきれとくさら
もあまたくらひくるもれはいつてよみみれぬ
秋ましぬ身はうちんとそかしおしかゝるかれ
ねかすのけしきいさひてかれあつまよきのさりかへ
ききしれぬさひのひまもなくわかあきらくしき
みる人ハよのうきことをえもいはれぬひとあくまでこ

こゝはすハ命のきてまうでもかなしやふらて一ハいかゞせん
しきかへらにハそひによろこそよろこ君人ふかくかれにたまふ
さりとては三五夜中のかげのみやよるのちにしてかげのみにちれきさ
年ふれば人ぞをなしみだれもおもひしさうよめはなのもと
うつりかはりて我世にかはらずそのきえをとゞめおき
はかなき世のならひをしらばそれのみをすてやこそすまん
我こゝろにたゞの歌とをすくさしめうきかのかつ給ふ
こゝろすれば人からうけてこそみかへしても人のまなこはなれ
いかなる人ともしらいひまくてみえたまふ人ハたまはし
世にいではあらさりしをん情まで教へしき我身なりしを
春秋の色もかならずこのかげもかれぬ世にそれは
ありそ海の浦吹風にかくれとも やむ時なき也とかれ

たのむへきこゝろにもかなはぬ世中なれつゝされは世へぬるにも心人
円のまなをハあまたの今ハさすかにへたてなき此懐をしのびかけり
春山にて世を営みの旅のすくハ恋かなき孫とや独りの海
悪しきを誰かいふ人ともなきに只ひとくしてたつかふなれ
さらとのいへ世にさもしあはれてなきやとのかへのいほ
きりへそれかかうつくれきさ所にしまれに只花のきゝ世をかく
御のうきとせむにもかうつらきことに紫のゆかり我家なれ
内くれハ西によろこひをみし月見の夜やすのおもひ
此世にそらん世のきつくと歎くにハ何を縁にてきこゆるさてこれハ
流の池の流やいしえふかくてのかのとし〳〵ことからん
花ふくその夕暮の秋をかなしふ風ハ世にもあはれやさん
遥かなる人をうち鋤成すことしいかに絶えたるは世の中かうつすなをるなは

ねくゆして人ひかさん無縁の物あはれみある也御きんしき
無分別こそ此の義ハ知しきけつきみちのくの奥之縁なん
何れよ元の如く山路と同人あしくいはしこうへ本ゆ
うき所よんさしね行脚よらすしてあさりわては見え心
人いよらしらぬをふ見れ気色すなみなん地を今此人さし
何れく多縁しし心しとやうて西しのあはよりけり
我抑ひ日本此新ハ抑く山のは茶此方まれてさささ此ハ
わさくのうさてく此外の神のめくこと抑しるかな
しくのこ忠てさそハ都ぬと行れやあつりうよ
りうめよ義いつすれさつさひてかうしを母よ行人と
ありより絵すつすの今ハうろくつよしき所ハ安楽おいらん
忌ぬし大文之人よさのめおの人無らわれくつ花の跡へ

山海く所へ此くしつ人的来まくやしききせゆあれん
よのつゝ傍人りやあわのよなし世ひをすれ都を便
いつしれくゆよもあう月のさやくしき所をされは存ゝる文さ
今わしん扨あつよ西さそうれ行す友の心すきむ
くりそぬの別とし人やおしつんやうそ西しのくさ此花と
跡れるすあしるよのかうしもも月丑やふいけくふ
扨く山よう他うのかん人な行さ八人の海よや夜まる今さ
まよくくよ気強の見さ所をすすすよ地と出やり めう
かそるよね所よしうつりすハ清之済う神よ仏と御心出さ
山川よ洪あつし清ことさを頭さうあれきこゝのいあまりしよ
人をれぬるとは気れりしよ様めうさは山しのなは花つきすさる
このく本とあゆく清し洲よみをく義をうへさ

九十九首並ニ一首差之
み日乃山こもりかみ此枕をまふしくて沁泌
の御懐をかれなるとみてさらしく給
まつけしく百首よみよりよりわかるのく
乃ことして無下まれ道こうへ

百首和謌
春二十首　堀川院題
立春
春くれはみ山よりは霞こ吉野の山もかすみの見
子日
こうおそくは子日乃松よくの為にさ斯きくよ緑
斎之

春の海とまりし此夜は雪とめ高く残りとて見つさこそ深山
鶯
の年梅ふしくもの花の枝よめそりなくとも聴
若菜
めくる春よしまる人でよ年よりわたつひきや経
残雪
あしらふこきこせの雪も残るは敷石とみとかき
梅
あかくよとそよのかつりや紫乃梅の色え見る
柳
春の海は浅くされとみけれ柳のまゆ并に凪
早蕨

武蔵野はまた富士の霞とけよ末の草かくれなき

桜

花ならて何よりも世をはかなしと見れ大吉野の山も悲しき

春雨

こと姫はむ月にさらすやうやう春の雨をも侘しかりけん

春駒

春日野の野におりし春駒は秋の末や人のひき見ん

帰雁

帰るさの雁もうちわかれぬる花にや帰る人

呼子鳥

よそにのみ声の聞えて人をよふ鳥

苗代

苗代は稲の落たる末ならは秋おさむるやせまき人

菫菜

摘みにてあれはけふも独り野の名をとたれ

杜若

袖にふれて何の杜若何れのつまの名をかこつ

藤

春の庭は木の下みたれ藤波のこす

款冬

花ならてよそのみ山吹の色にや惜しむ心

暮春

行く人の惜しむ心もよそならて春の暮ゆく

春十五首

更衣

桜色のひとへは袖にさもかはる衣更ぬる夏のやまかけ

卯花

卯のはな乃垣ねは雪と松風のわきて見えぬ下の桜かな

葵

日のもとの二葉とやとし葵草そのかけの社は絶しられ

郭公

くつわ絲のひあかりて郭公里を尋ねてまちきこゆる也

菖蒲

あやめ草つくつくひまもよみしぬはしめの家のかほりて

早苗

早苗とる宿のつまわか苗とりしちまち田にかへりける

照射

さ月やみはやまのすそにしけるしかいつまてともし火にあふ

五月雨

五月雨は日数かさなる滝つせのかはりて川のなかれもしけし

盧橘

日のもとに花たちはなの香をとめてむかしの人をしのふ宿かな

蚊遣火

夕されはやまかつのかやりひのけふりにむせふ宿の軒はに

蛍

夏の夜のひかりを月にまかふなり秋のたもとの露のかすかに

氷室

まつへきはけふの氷室の代々をへて今も絶せぬ氷のみつき

泉

掬ふ水乃岩ねにかゝる音きけハむすはぬ袖も涼しかりけり

蓮

我杖よ蓮はへてみつのみれはなかれる香をもしくまれけり

荒和祓

有しけ命のふてかむかしてなかるゝ水をあさかへ

秋二十首

立秋

きのふにハ秋来ぬとなかりし風の音そさひしかりける

七夕

ひこほしの妻むかへ舟よせよとハ天の川風に秋はたちけり

萩

何衣れの我里とそみるかれなかれはまさる枝か花ぬれかり

め節のむし

世の秋後乃我里雲深く鹿のなかれてなまさしき露あまし小

旅人乃萩

旅人乃宿かる萩のうつろひて吹く風に袖も衰ひけり

薄

とゝろさは秋風ハ人のなひきかへるの心

苅萱

おほかたに乱れあひぬる苅萱のうへに吹ぬる風のみ吹なれ

蘭

辛個へは秋の籬乃白露のきえてそかりける小

雁

めくりあひて時もあれわれをしりけむ庵のたえし人

雁

しらの多ゝ我身にしるや人や秋の露ぬれてしらん

霧

峯より雨にて秋の夕霧我世にやとりの山のふもとの霧

荻

荻ふく風その雁の鳴立ちまかへ夕萩か色くなれ

鴫立

東路や秋の夕ひく鴫は見すとも尾花か穂に露もこほれ

月

今宵かけてつくりし月我かたになを住む

槿

よそに我きく人の宿の槿とさくやらん

擣衣

秋の夜の我か袖さむみ衣うつ音もやすらぬ里の夜もすから

虫

草むらに虫のよはりて暁は我よりさきに露のおくかな

菊

いろかへてうつろふ色も惜しき菊かな

紅葉

紅葉する秋の山風吹よりも紅葉は山の

暮秋

暮秋といつれの年もおしめとも

冬十五首

初冬

花薄秋乃千種をさなからふるを我おもひをそふるみえらん

時雨

山里乃庭乃木葉をさそふ時雨夜のめつらしき月の宿

霜

霜さえて置しもしるき鹿の音にうへもさそ緒やよはかるらん

霰

志のゝめの山の端しろく初霜のひとむらまよふ霰ふるなり

雪

庭乃雪よ我跡つけて出つる人をさそひ待つ人にみえん

千鳥

よさむ浦浦の子にあけて千鳥なく声しきりにて松の風にそ

寒蘆

浅乃田乃水乃跡にしむ浅茅か霜の葦の葉そよく葦の葉ならし

氷

廣沢の池の氷のみかゝれる月をもうつす夜半の月

水鳥

水鳥のこゝろをとめてさゆる夜にうかれてや鳴く

網代

年経て宇治の網代のよるひをも氷のうへに

神楽

暁の星もかゝやくあさくらに影をうつして明けゆく神楽

歳暮

くれはつる年のゆくへをなにとなく惜む心の

炭竈

冬くれはやく炭竈の煙ゆへにたつまてしも大原の里

埋火

埋火のあたりてをる煙出るたもとさむしろにしもやしるらん

歳暮

春秋の別としもわれ年月ハ我身にそそふ何残るらん

恋十首

初恋

君によりはしめてあつさもしらぬ色ならてかはにしらせん

逢恋

あひおもひねぬ夜の夢を逢とみて渦と袖にぬらさつれなき

神寄恋

ひとりのみ思ひの渦にぬれとも袖にいかなる川瀬よりみん

不逢恋

我よりそくるしき思ひをしらせはやさても恋しさたへしもなん

片恋

あはれとも思はぬ人に思ひそめてこゝろのみとかくもさためなん

後朝恋

きぬきぬのみたれてけさのわかれをしのふ袖にかゝる白露

逢不会恋

たのみてもかひなきものは恋つゝも又あふ事のたのみなき人

旅恋

ふるさとの花の色なき旅寝にも忘れぬ人のおもかけそたつ

思

とてもかく人やうらみんつらき身の思ひの涙さへさへと

恨

いつはりの人のあだなる言の葉に恨て年のへにけり

雑二十首

暁

まだ月の山のはに出くらき海にも名残のあかつきのそら

松

久しくて年ふるまつの浦風にかはらぬ色の千とせをぞ見る

竹

唐人のうゑしよゝのみどりの竹をこそ猶いつまでも千代にかはらぬ

鶴

しら鶴八千とせふるはあまたへんとしは千年のこゑは猶たえず

山

しき所備てよろつ万歳とよばふこゑこそきこえ山のかひ

河

くもりなきしきみの雲見ても絶ずながれ川なみはやきかな

野

かすみにむすぶあきの野の花ばなに風もなくつゆのおきゐる

関

東路のすゑをまつる人ありて旅の人にあふ坂の関

橋

世の中にかけてもうき橋の道へゆくらんわたりゆく人

海

遠く見る月にうかぶみなとの浪もよるせなし

旅

都をは春のさくらあめしさへたちかへり山路行らむ

別

旅衣つゐにならなん行かへる別の袖の泪こせよ

山家

世をいとひの長谷をこしらへて山里に住井なる

田家

暮ころひく行々門田の村薄あやつて下ふらくさ

冬

なかなかに冬のうらそみる夏はもみち葉は

懐旧

むかしくは昔ある門の跡まで尋ねし人の行衛をも

無常

ちる花やうき世の中をつひにて死出の山路のたのむらん

釈教

鷲の山ひかりのまゝ晴るれ月にやみをなかれ

祝

きみか代は若のゆくへも雲井の空に

述懐

墨染の袖にこほるゝ涙のわかつけ

百首和歌 春二十四首

きのふ山霞のかよひちのさかり人のみちかん

山梅ハ三月日の朝霞にかすみてハ春もいまたさむきにや花さきかねたるを
山里ハ雪の音ハ春に氷とけ山すそも春に鳴すまし
鶯の声にさそはれてさく日の花とみえぬのくれ
吉野ハ山ふかきこともつゝみて見えまたきにも
今ハ鶯の声にきゝ侍りて咲花の色をまちさため
いつしか春をまちつる鶯ハ花のよそにや鳴らん
梅の花ちりぬる後も待侍るに花の香もまちわひけれは
のこりたる花もちりぬるの鶯にて雪の山への花をかくるに
ちりてわたるゝまてきゝ藤にかゝりわたらせるらん
春ハ雪の山をかくすにさそひとき雪をふらせゐる
みよし野の山も色に何かは春の桜なれとも
霞のうちに山のかげも花ハ咲なむとまちてこそ

吉野山霞ハかすみて雪のうちにも花とまちけむ
ものゝふの名も見ゆるしるしにとかめたまふ花のころ
山の色も白雪と見えしも吉野の山の花をおもひて
春の日ハまた桜さけ山里は霞のうちに色も見えぬ
咲かねてたちまちにも花をまちてそ霞にもかくれ
春にそ吹風のをとにもあらしを待つ花の色をおもひやり
桜ものこりて春の山のはなちりかゝりてみゆるかな
春かすみ吉野の里をみれは花の色もさきにほふらむ
あさ霞や花の山をかすめて春ハうつろはむ花
こゝろをそへてかすむ夕暮に山の色もかはる山の
とやまの花ハ雪と消ゆるやうに散りぬるをいかにせん

夏十五首

久かた[illegible]人[illegible]其一[illegible]
郭公[illegible]この一声[illegible]聞[illegible]
[illegible]のさ[illegible]
[illegible]川[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
世[illegible]
[illegible]山[illegible]郭公[illegible]
[illegible]の[illegible]秋[illegible]
[illegible]のこ[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の世の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]の木[illegible]秋[illegible]

秋二十三首

[illegible]秋[illegible]
織女の[illegible]
七夕のけさの[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]秋の[illegible]
秋の[illegible]の[illegible]
[illegible]秋の[illegible]
[illegible]

袖よのみ涙の露をたゝわまて秋まやまつ秋みよの月
いとゝすさましきみとりその＼の風ともさら虫も鳴ぬるそとえん
宇治川のへはよるこゝやさき山里は秋のあはれを
氣紛へてはよそうつすらむ月やさき世中と言ひや言はゝ
かなしむ海あくのへの之等まとひうりはまたわあらうゑ
行のうきや月のまきよさらへ秋のへて空はまて歌
こゝろしるまてくにむ雨やるらし雨月さしまとえはれ
関人へつそさへねをうらえ伏見の暮のさ洞りの歌
こゝ風うさる山ぞあらは廉はいうひそのまふし聞けらん
長き夜はからまへ風すくさあて秋は廉の故いそらん
秋のさゝさやくうきもへてそ廉も故まへ情ありさらん
今はわは齢もそのへてはやつもへさ世をとうまえそん廉のきれ

秋山のわ無ハあや染つ人何事は冬の地とまそあり
山里の竹のうけのゝねそ木よいりそちれ紅葉のわ無ハこえ
もり秋と尽むむ袖の夕あやおすらいつわれく袖よ袖らん

冬八首

ほのゝへめうつりらん神無月ちれわころとたゝれそふくるゝ
わ無かうのちりくそめなれて枝のそよ時雨多くを増されもみれ
されは山のうゑの社の木のりはたるとあそれいのうりれ
さひしさを何よゝ世をうつ梅花むまゆるの春の冬みえの言ふ
冬の夜は海さいる行よ冬風のさひて置をとるかはれ
うれのゝそ絶まをてもさつけ人の水を氷りよるうわ
常はけの雪下の苔の夜ふかく夜半は風よさうのゆえ
天てらは外の山に常よ庭出ちさくそはうはそれ晴れ

雑十六首

ゑのみちは猿のみちとて人をちはやふるいかにうきよのあはれ
さためなき世の僧の袂の秋風はたゝ月のあはれとや
ほとゝきすなきつる方の空くさめは色なし言の葉の秋の色も
住わひて山の世をすてゝ人のかよひぢの人はなにとしても
ゆくゑしらずわかれの身のはかなさよいつしか夕暮のそら
ありし世の夜半の月のみるへき難波のあしの葉にをくつゆよ
うつしゑの跡あるゝ花よりまさりて人とふる人はありしよの世や
むかしをおもへはあはれ世をうきものに思ふすみよしの岸
しらなみのよるさへ山のまの雲あるときはゆふけふりをなとか
庵ならぬやとの夜半のおもひ草けふりすみのふもとの浦のかた
たちわかれゆくともつらき涙のうへにうき世をなと身のはて

しら雲はゝれてしたゝる露のなこりは峰のさむしろにそよ
わかれにしのゝめの月の影くもるとき秋の風の情に
花の色はうつりにけりないたつらにわか身世にふるなかめせし
とのみいひ流されなん事のいかにあはれなる心をしれ
よしやたゝおもへはかなしなとてかはわかれの末をすまし

恋十四首

月のなさけのかなしき月のはしきも子をとをき山の月をみて
秋恋八人をわすれの身の末を君のこひしきにつけて
思ひそめにし恋の心はかなくいつの世にかは
見しよりのちのおもひなしとてはかなくも
いかにせん涙の露のこほれて袖のぬるゝと
かくれなき恋の道にたえぬ思ひは君の世をかたりて

とのゝこみつかさか情をそ忘の花の葉おちりそれ
さもくいふのつられわひみてさもやのむかしき
色さとーれのとあからよけよふゐさこふつやト
今へさつゝさ忘へさそめきん年迄られさと秋よとしよ
いさそん見其らさ色と作るみさへ雲のらるまけしそ
さかく袖すひまるくて春の日の人つらつくゝゆ
なく山さ州八毛の君られ恋りひられハ手り叶り毎り
らるけさ冬ゑ久ま救の移ハ我参りわ叓よみおらん
不爲百首之義自我不詠之撰哥
取集書之海百首也

日吉百首和評

春二十首

おとりひろへてや春ハこしとまりトなあひも我出
いりや山霞の袖とひきうけてゆくそてそみまからき春さめの
ふしのゝのつけのまさ吹の其霞ようら春の花紅
霞くぬつの沖清くて唐南ての花紙ぞうつの花
このき人ゝのみをくや霞しくあふけのまの春の物あの
花守花宮の南さまへつねて鳴鳥もまさしくり
夕月されはさしけ候よさくつゝめハ春の花よ袖そゑれあら
梅ひ也ふうさの花ゐられけそうすさの風にきさへくら
山さしハ春とそ人ハ南され花れ梅のさうえよ宿と南しも
無つと柳へ紙花と色ありて比のむやとう見田り外
若み人の紙や吉野山ひよ南へつさしゆゑらん

吉野山けふすむ人のあはれ知ねさくらはなのちるをしもなき
よしの山さき世にしも小桜のちるらむまでもなどかへるらむ
あらましやむかしのかしくこそ待むかしのちりにちるらめ
花の色もこゝろとゝもに何か恨む風のさそふて霞かくれの
帰雁も行道にまよふらめかれて霧にまよふ露のはれをしらず
さゝめかしりくれたるそ去られぬゆく春の名こりいたる
春には花と雨のまゝおれしもはやし雨のつくりをみれは
山吹のうつろふ水にみえわたるそのかけおのつからしるらむ
君かためかのそこのみきの松をまつにも露のむすふる

夏十首

卯花を衣とたにぬきかへて山郭公鳴そめにけり
五月雨のまなくなりゆく郭公なく声をまつにかねてまちぬる
郭公ひとこゑなかりし橘のかにかほりしかなしくて
河のせとたえはさきへも雨もりの秋の空なく
六月夜はさひし入河に水こそしらぬ尾花やたまれにまよ
さみたれのさわる尾かぜ吹はらふ秋にかはる峨の
足な月のたもとゆかぬ日さかりにおつるうちのの蝉の鳴
出けや岩かゝる水もさえて夜のあかつきのうしの
夕されはそゝのよりくるまの木枯風に分く涼しき
夜もすから夏の涼しさしむしよもや川風

秋二十首

いつよりのかりかね聞き鳴吹色ぬ秋の袖風
織女は久方の衣の袖枝てこすひは何をひきさくらぬ人
小萩原しのたえぬ露のむすふれそよさよいとまれ知みよ近

秋乃野の花[illegible]ぬり[illegible]ぬは[illegible]なかやとりとりの声の 色そ

夕まくれ松の[illegible]にうち[illegible]り[illegible]ゆかれ[illegible]

[illegible]乃尾上[illegible]ことの[illegible]風[illegible]

[illegible]しの行[illegible]くの[illegible]

逢坂ハ月の関[illegible]東の[illegible]小

月影の[illegible]水いく[illegible]

照月の[illegible]山川の水

月影の[illegible]秋の[illegible]

山の[illegible]川瀬の[illegible]や月の[illegible]

行[illegible]乃[illegible]て[illegible]月の影[illegible]

月[illegible]の[illegible]思[illegible]の[illegible]

門[illegible]の[illegible]

夜[illegible]の[illegible]

野への露尾上の鹿の[illegible]秋の哀と[illegible]

[illegible]山[illegible]秋の夕ハ数の[illegible]

世中と[illegible]人[illegible]の[illegible]秋乃[illegible]

[illegible]秋の[illegible]の夕くれ[illegible]秋の風[illegible]

冬十月

さひしさを[illegible]木の葉[illegible]

時雨[illegible]木の葉[illegible]の[illegible]

むら時雨[illegible]

[illegible]人の[illegible]時雨[illegible]

神無月時雨[illegible]

[illegible]山の端の夕暮

隆ちよ浦のすゝ色しられて秋しる波の声哉らん
木のしの葉ちる庭に月さへてよりわし虫の声まさり
れさんこゝもわあられ行くすゑさぞ恋しされ
独りのそのうちすゝしわれは年月のしれりぬまよくらし

恋十首

あまた入ぞめつる文よりいまゝつきは恋の淵となし
口の恋はためのうへすけ山わりやくれとはすてにみつ
人まれてうきみえぬきうの面影をわしぬき涙やそひて
そでの色なうれよおもわりやうつるこりいれかゝり
我ひとつの恋路はさらし面影はくへぐ
おもさとも人秋後は世の人とみよ閉よりつ袖の
今しらずそめつ下は常よりも

先たまよ宮人の情もちうらんわか涙は涙ゆきゝ
人つまくらよ世中のつらきやなのは恋すま倒しつらやえなか
くしておもへかさわまされぬ根かひく後世のむひのゑ

述懐五首

世中は蓋の葉はおもわれ作り露の身と思ひわびよ
朝夕は晩山よりくやされたわのいろまさりやつの風もうらん
山ふくさひしよ宮のあたりしらすり
年ふれと其の色
世

無常五首

大かたは草も秋
鶴

ちるまんはかなくて人まつの山さとにひとりこもれるこそ人しらぬ
西にゆきて世のつとめには西はまさしく言る人けれはかりなるつま
我こゝろあかぬ別のわかれ路におもふへきわれぬ世をは別

雜廿首

立よりしやとりのつゆやいかならん身は志あはて人のをさな
くりかへし此世にはけさ武士のかすくにしられぬ名のみ身の
君か代はさしての中のをもふ代よ君よりあかて
さくらゝの橋のうへとめみけふとしも
秋風にのこるとも見れは吉野の月をかく
月影のさしみわたる道の辺はおくしらぬ
露の世にみちて弟の花をみつゝもあはれ
めつらしやむかしに帰る人の心にそ

夕暮は都遠よりしれ心のうちそ吉野
中々人しれて独のをすみしれて歎きて庵の松風
さしのほる心のそらの月影をしは夕くれの秋の
月の心やさきに、めくらすとも遠山のはにあひの
吉野山さくらの花のおもかけの世のはかなさにつれ
我さへものかなしの奥山にや世のうき絶ゆる
秋ものさひしきの月影は心のかよひ
たちそのこ人乃露とのこりまさらし
みちのくの月のさかりの花のうへにかへり
あつまの露のちりやまの月のうへにかへり
袖ぬれやかわかぬとおもひの涙にしき世のなか
こゝろのまゝに山川とかみのゆく流れの

御裳濯百首　二見

春二十首

くもるらん霞たちえにも雪きえてひの春もさしもせぬ

吉野山のへしろたえにうつもれし谷の松よりみとり子日せん

よそにきくぬ鶯ともにわかれてもこゝろの梅やさきぬらん

鶯はつけてやつてんこゝ山へゆく春乃ことしもまたせぬかな

川くまのまつあやしやくさ露の袖ふるもみえしこきる

名みつ花をつれなきあさと春のよのやかましそ梅の香そする

立田川波よりてあらふ柳のいとみたれ乱髪とかへる春風

さしまかやとる山の霞ハわかハ吉野の奥の雲のかゝる

みよしのゝ吉野の山乃山かけに春そまたなくみえし夕

吉野山わきてあるまて花かゝりてそみゆるかな八重桜

花さかぬ山ハこゝろにかゝらねはいかにみるらんひとの

里の名はなにか花にはあらしてあれはかすみそかゝる

吉野山梢の奥に花さかは又あくかるゝ身とやなりなん

かつら山雲の梢にまかへてもかはらぬ花の白雲

春も又花のふるさとかさしもの後の秋はくるゝかな

山ふかみさくら花そちるなる雪にひとつあけてける

ぬれぬれもさくら山里にかすみさくゆく

春のひかりをちらん田子のはれしら露の

山吹のちるとすむかはつなくなり

月よみて霞ひかりのうはの空のならむ

夏十首

ほとゝきすまつ里の月さす夜半のかたらはすかな

夏の夜しほりよりもみくさその神山のあふひはかけし
人まつとさしは雨もらいしき木のしたにたちてさえくるうきくさ
郭公その声まちし此君にきかせてさりけれ
八月の夜は月のあやめとてかりかねのこゑをきくも秋になく
鶉なく一むらすすきのかけを枕にしてみる秋のつゆ
夜寒の衣うちの声はおそく此蛙と松虫にて
声きりてなく秋はあはれなる浅茅の村草に
風のふく秋よ夕てりのち雁かねの一つの夕風
山ちかき庭のこゑとはかなかるらむ此かはらん

秋二十首

夕ぐれは秋のあはれの風のふくにそ知れ
山里は鹿のなく秋の神なりはしれ

月ぬみかふのやこそれてはやみえたまとやふ
しる国のかはひとつにみなみてあをい此秋の月かけ
さしはうら月のひかりにわか雲はれ海よりかかり
うらやましくかはきよく月をみていくよのあきかさん
月けよらかて夜半の声にて鹿鳴る秋の山里
鹿のなく声はあはれや秋の夜のかさねもおなし
なき鹿のしかはなれは夜の松にひとりかなしみ
そらなきさとゆくまてふる人のゆめやあさちの露
あやけみとむしのまつむしの声て霧あらはる色の
りしらやく鴨ト音にて都の海の関やの秋の空
ものゝめやさかりの影ふして鳴の声のおとれはのなを
秋乃野のむしのこゑのやの夕暮と秋風にたへぬ袖かな

白菊のはなはひさしき宿かれて人にしらすの秋風に吹はらふらん

月よそへ久かたのゆく秋山のもみち葉はちらさりけるを

紅葉ちらすしくれは山のはの紅葉ゆきとそみえて世や

小萩原露かれてはまかりけりむつましき庭の面かれ

夕月くれはなりゆく雲の宿のたえまよりしはしかけけ

右十九首在之一首落之

冬十首

霜さえしかれは時雨る庭の木の葉をさそふ

立田山梢は見てもみなむらの小紅葉の色に花の下

志かのうら氷の上に秋ならて見るもさひしさ

山里の木の葉の上にふる人もなき庭の音はうつりゆく

冬かすみの池のうへに流れての秋の村雨

志らの月に影のさやけき冬のよの夜をさむみ

山の端の月はあかてこそ出しやらしほのかに

霜にあらしは吹なかれても寒き夜の鴨の

あきかせにたゆるまてはしるへきそのうらの

結ひそ世の紅葉のうへにかかるしらしら

恋十首

松山の花の香に今はむかしのもとにそ

いつの恋は雑にあかねの草の葉の

しのふる恋はわかれのなけきをもてあそふ

結ひをの契は袖の雨のなみたにかそふ

涙川つれなき人の袖の上に流れて

とのかよひ路のむかしにかはらぬ

忘られんしらぬ世ふかくつゝかゝれとこそいひけんたのみしあと
世をいとふゆへなへてさそはれて忘れとくれかましおもとうかり
今もまてまつらさわたらうれたへてし此忘をとゝ人のなさけかわかり
夕まくれ身をとふ袖の袖のうへに秋もれおそのよ秋風吹

述懐六首

みよしのゝ山ふかく我いゑにつゝゐて人のすまゐせんとまゝなりける
さひしさはいつもの末とおもひぬとそ、たゝしらぬ世にあらぬものかは
せめて我まつ世になる身の置所よりのものからはなにかさためん
あかつきのあさのうすのみせさりしのみとこゝろ、みせにふかくもへ
いまはたゝいとひのみにつかはひとつなれはの花をおもへは

無常六首

名に鄙山庭すのゝ橋の上のふるさとの人の袖のゆかしかりける

すむ世の中のうれしかりけるとて又これ世にはおもへはいかゝ
みな人のまゝへすてゝゆくすゑ我かるへはしらぬをかなしきに
雨にひかれてなかめやるみな人の夢はうらめしかりけるさくらな
きのふさはいふそとへ雨にしぬれは世のうきとなりにきらはさく

雑二十首

人はみな我をたちてやまふか雨に秋の夕くれはかなしかりけり
秋さめやたかまつは宿の上の月はいつらかひきもなき
うきよのなかにこそ雨の名をしりにけれとくちのこゝろ
ゆめさらにいはねかゝるほかに見るあはれなる山のおくにて
いつの間にそうつしのまなこことにたくらへたし世に世
暮のあらしいとのみすまて又いつかあはんのかなしかりけり
遠をひとりに乃稲のはしよりしらうみならは過ぎたる

入日よりくれなゐにそ世中といふはかなさのありあけの月

わか身よ捨すてゝ付をかれてこそはなはたしき山への末

露さへすゝしき山さとのみちくれいへはあまりすきみたる松風

山ふかくたちゐてねむるともすまさはかなはたちはてゝよの

あくかれの夕への秋の山風はおもひとちける人の心の

いかにせん友にもとむる山のすみかをあらはにそみん袖の浦波

春の夜は枕さへもしみけるたきつせの音すみわたる秋の夜の霧

谷川の音に月すむひとし山へ入れさへこむるむかしみの

人もなしや絶えむ山の谷まにこそあれは沢の水せきかへる

世をしのふすみかへ海と思ひけはやとの月の光

此世をはそむくへしとあるゝ中に手枕の袖の上の露

津の国の道のもしほのけふりなかりけり秋の夕への

くさくさ侍らはそれこそ我が身からいせの浜にこそ侍るなる

卅一首御奥書に二十首とかや也

人のみなけりのこゝろのいふちとてさかりはいはまく月の秋風の音

猒離百首

依圓位聖人勧進文治四年秋詠之

為大神宮法楽也云々只結縁也

四季又十首　文治三年十二月晦日三時之間詠之

和同行述懐

春

春くさよの夢かへりてもむすひつゝやまにねさむる月の

ゆめのよにおもひのへなる山のはにかかる雲さへ夕霞

世中をいとふ山のかけとてみつる花なれはうき世の

梅のにほひそめてあまりさすかにはかなさきかさ春と告る

行ひてあしぬきらしよ今日もよ去年ハ忘し春や御の気
まのりしと行きまんせんとうすて花なりむしよいつはわ
冬そらもしにそゑしれた山桜さくて帰られ花雨にも松井す
さくらも屋を思かなひゆへにこはおかき山里
久しきの月よ秋とし照らん風に吹かれてむもの白ひと
春のもひ桜の散にも落ちりわていぶすてり吹く待よ海ぬ人
しほ見へ風すへはりよの雪代仏ハ何らかはむひ谷と花よ吹らん
ワれもまよりの弥生へしやこしちかくえ雁かゆくさ
世中とはふ思ひのさひとよりあつ桜ハあきよみつらくそれ
去乃田のから雨かやそけ世よ行きし又帰とときへ行くるへこにへ
露へ入けハ花の盛を待の残りて今ハかりまに　維子鳴し

夏

むめのさそひ夜はまよふ春の気はひしへよ今ハ呉竹の袖
世とはふ消えまうゆあやめ草のし引や浜木綿のうへとさ
世中よあみしめひとみ世の中はかれ人恋ひ去ひらん
いつまそらくもおいらん郭公すゝねとまつて鳴とられしと
郭公花橘の枝のかをむかしの人の人きくらし
くる月しや夕ハ菖蒲よ思つて秋まちつけん身ともちけきん
けふはぬかのえの雨毎に草の露よ見え行しめやハ
赤つのとまりしよひに藤とみて池の景やえしうらん
身ともつひとりしても秋の袂よし行世とうハやさえぬ
江水はさく菖蒲吹てまれの雨さやみちへかり

秋

世中のうさを春よきそすまして入へ行もろ手す秋也初風

わすれ人はつれなけれや秋はいかに此の世にはわすれん
織女に去年の秋はわかれて後ひとりのすまひとそ嘆きけん
いつまてか涙をやすめてかゝ女郎花と一時夢と一時
こゝろのありかはしらす宮の夕暮に世のうきもなく鳴
さ鳴のねのよにうれしく鳴我ならぬあはれもまさらん
ちきりおくなきも中てあのかくやと思ひ松虫の声に
三日月の影そへてみ吉野の山のあきのはかなきみちのそん
寝覚そうきこの西への空め月は入てしつかなるあはれ
世をいとふ心の宿の思ひいれていつしかさきの月影そ
月ならて世をいとふ身の心めくりむ言の葉そなき
いとしく秋の心みえて露にたくふ
虫の音そやく小萩にちる露のみたれ

わかれ行人もなしや松虫の秋くれはこの夕くれの
こくはは菊の白露かゝるとてつれなき人

冬

みなかみはわけ山めくるしくれは時雨のなきかけ
かりのやとを山守のさまよはれん

一首落

雪の夜のつかれ

世にふるそ

ゆく年

いそつくと言ぬと待む年月ハさしあてゝわかみにそへり

雜五十首

山ふかくいかつる我ハいつまてかなかれて住み人ハこしやまれかくれ
る我ふかくハいつくれん吉野山にも世をいとひすむらん思ひ
兼好法師思ひやつりけりわかきそしむ夜よみ秋の行衛
あさりけりそらのあはれにかくまつの袖のかゝるれ行衛
すひ何なるよとふらんやとるらんさとのわか身かゝる
みなしそしき世ハさそしる方のしかりわかしとこひのゝかなん
我よりまよ世れ油さき行けらんそむかぬやよ思ひ
あつかさらぬわかすしめ我ら流にみてあらぬ山ちよ思ひ入
無後の袖よつみゆかしき世まゝゝそ行かしむめ
世我そむくよ向ひつや行よみる雨とかされいらまし

心ふ人わけしとすゝぬらすのゝあらく所くさみとさとや
こしいつまよ又あらいかはよしらくさぬ世いこさハ心ふるいわ
おりまよしらぬ出る旅よあらしふかいさ世なしハいふ出
たくもよ水の面ことゝわれよまぬをお旅ハ宿るハ
みのこえいつらぬとしも秋ぬわれハいもまてあるもすかの宿
本のりまよ秋けいん我とみよをのゝ社のらえかけ
いてけすの〻さらの山よいかれゆかく我すしらめ花の
ちかくらや我ハそかゝ彼乃よ方ハいかれ人のみちしら
はのとちくいかとも花の盛代つえとすゝすと行しい
山桜く入もる人乃別といふゆりみつそまいわしく
世我そむく山の夜とるる方これ我ぬかしよう行ける
見入雨よの夜とふる雨ハさき弁の宿まよ物つうけるか

百薩あり雲の山田にひろひとくつなむ八ひとさま
くすりによ八れやよくらねそ井祢代月とすかぬ
せ細へそりくの錦と錦ぬとまろ八さひさゆよひ
いつ秋くらきに海の志ろきり人みまよくふあとと花さく
海ちろそみ花くろく八霞たちわかやそ霞ちまたくさえ
まくとそよおとろく人にちすさあとゆく風ちひとすきらん
蓬生よいろさとくへ八よ露の風八くよ人見る名あるちの
よ露の分りの右木とを流よみそしるひとろあさそ
おちさ仏とけ夜とよへて雨とあすんやそ雨との雲とるそ
わりのきよ入秋さよ夜八秋すれやくるぬなよとひ人あふ
人さきよふみの月の嵐の月るれそおとろれぬ八霞ちたり
ろうきまわくまくるわなれ八りくせんやとに海そふう八しかめくあ月

やみらぬふるとろ月り陰ひとつまうのあまれんらやりくつよ
霞れよ八治と陰つまよたつ折とものくちん今知りや必あれん
よくわりよおりよひとまき秋よしあれ八世を捨てそ世をそ
おさらあさくさ子乃倉ま秋よその三にまありくさ八よ分すそれあ
住山さくゆく秋よのわすそ海をと乃ろ秋と流つるみゆれ
去乃りの花さと気とみ人八よ山花の桜あよとく八ありれ
松無ふらの番夜にまろわ久らへ夜松の音さんとしらき世過り
世と済りい代節分ちくまよひとも錦あちらさ分の世や
りわ川りれりつひとなりむすくへとまとつろふきまえひ
あるへ世ち八とそりて久高へとみふまて代山錦れつるの涙
山桜秋のよさとまろ夜つきよ花らん八ちろすくやかん
さきさらて夜の海やつかまりむすき世代れそ芝の月

とひくるも人もなき山里にわか松の枝にかゝるふちなみ
心ありて行かよふ人の世をすてゝ世をうしと思ふ人
あさきかやあけくれはなくさむへき身の心のうちに
さるかたの月のかけさすつらきをうき身にそおもひしらるゝ

同前一首御奥書云五十首之外也

こひあへすそのかみしのふ涙はかり行ゑもしらぬ身のなるゝ

僧晴去擬草庵同前也但者思事
先輩居大原則不其列諷吟百首之詠
而不堪感情則時和件詠耳

拾玉集巻第二

楚忽第一百首　讀人不知

春部

立春

明ぬるかよはの霞はへたつれと今朝のみ空に年やこえぬる

子日

ねの日してたれかはひかぬ人よりも春日野にこそ松をまつらん

霞

八重霞たなひく山のはるかなるみとりの空をさやかにそ見る

若菜

春の野のわかなつむとて袖ぬれぬ雪消にけりみの春日野

はなかへかれ春に、ふるの川をあかぬ日につむ梅か枝

残雪

消のこるきえの雪のはまよりも春風みゆる月の夜な夜な

梅

咲かれけに大宮人もよしらむ梅をれ春の花ひらけれ

柳

靑みし春の川風ちらしてたまる露の糸柳かな

早蕨

さうしみの折のはまゆれとさつめあり雪てまくるの故郷

桜

おもかけに花の色の移せてもひ乱れて見む山のこし

春雨

春くさにあふさくへ人に立さとは此まゝに人まつそ名残

春駒

みかきもりつのくむすれは春駒のはなさきぬ梅のかほりか

帰雁

かりかねの山まかこにかくれつゝ越えて雲の中に消えゆくは

喚子鳥

すのあをうの間のいをふかきその梅乃山ハうつくそ

苗代

衣山田乃未乃川ハ苗代の水に此ことそうりくらか

菫菜

ともみれはもとのさかせハあさ乃あさみえをえまさ

杜若

紫乃名をも白に杜若ゆかりの色はなつかしきかな

藤

紫のゆかりも浅き藤の色つみしむらさき猶まさりけり

款冬

ちらふりてその河風も寒くてちらてや山吹の花

三月盡

これやこの霞の袖のすかたかなわかれ春の別の是てこの花

夏

更衣

あらたまる衣ハ色もあらたにて花の色にそめしたもとを

卯花

こゝの山卯の花かこむ垣根にて世ハ白妙にさきまさりけり

葵

年ふりて今もかけゝるみあれ草いつかはかけん神のしるしを

時鳥

郭公ゆく月やまたく五月雨の空のかたらふ声は一聲

菖蒲

あやめ草引のかたかたひまなれハ引ぬる沼のねを長みかも

早苗

せきとめて苗代小田のをかの山風さそふ早苗とる也

照射

よもすから河の辺にともす火に五月雨の闇はてしなき

五月雨

みたれ草八十にすゝむ山里に引ぬるものにさみたれの空

鵜飼

まちかねのもちつきもの居たにかはさしもたゝ音するよ

蚊遣火

ふかきよしゝぬる蚊やりは火の煙こそ浦人のたく塩風

蛍

くれすゝみかりもく飛ぶ蛍のよわの光あかし

氷室

としくふる御代の宗ゝ代よ氷室山かくてもすゝしかれ

泉

古郷山のゝ流れ井ゝもしてかゝるそれよるゝ山川の水

蓮

濁水よしめられてうけて[illegible]しよをくる

荒和祓

みそき川立河風よ[illegible]さ秋立夕の

秋

立秋

くるゝをはいはへよ世中よ秋の色のまなし

七夕

織女の今宵ひこほしの[illegible]

萩

吉野のおのあき萩のひもあは萩[illegible]

女郎花

名にめでゝしひのも秋よ情ありのゝ人のなれ

荻

さひしさは花にうつろふ萩の花にさへおくる露かな

露

つきくさにうつろふ露の風の秋もわれのこゝろか

刈萱

ねおれしのなきしのすゝき尾花なるらん

蘭

秋の野にかをそへたるふちはかま蘭かれ

雁

ひとつらにかきつらねたる雁の月におもひやるかな

鹿

鹿のねをさそふ山風に明方の山のかけなる秋は悲しき

西行

旅人乃秋乃夕のなかめにはあはれもふかくなりまさりけり

霧

さえわたる霧のうちにもたえぬらむ

槿

朝かほのひさしき花よりもはかなき露のいのちなりけり

駒迎

あふさかで駒ひきわたる秋の半の月のかけ

月

秋の月あかねさすかたにそあるへき

擣衣

夜もすから衣のうつ秋の衣のうつなり

虫

手にもれしぬるかな細やにほ葉さらに流れ出のあまし

菊

しら菊はよしのへて何のたん波ならく菊の下水

紅葉

紅葉をへつさらもしら梢しらぬそそむふ秋風さらは

九月盡

と夜の寄にとくちは打ち袖く時雨よしちとよろくくまなく

冬

初冬

さびしさよ秋くるみれいつはりはみな山雲へさへ晴まされ

時雨

かくれゆく袖くてらのそて時雨あられいやなくらわかる空哉

霜

草の花は秋に霜さえて尾上の風よさえ枯しはて

霰

秋風は人によそせて荻の風吹けしくも霰ゆるさ

雪

袖はらて庭に積もれこえるれ雪まそみやまへの橋

寒草

のあそよるの明るを難波のさゆき代も浜河のかれたと

千鳥

難波のさ夕波みなるいやよ衣は宇治川の河なるなりぬ

氷

結ぶく氷よ水のひとり渡し世のはせきよ流れまた晴れ

水鶏

緑なる川の辺のかきをまくらにて鳴とその声す

細代

すゞりかはの辺にさしぬる人の川風にやとりて

納涼

秋ちかきやとの軒端にさそはれて手に扇のおさきての夏

寄神祇

きよあつて神にぬれぬる衣をみなみ川くる（ぬ）の衣

虎竃

その山の大原山のみ雪にふく風としけされたり

梅天

人たえて衣手うち夜下りてしめりくらし笠株のこと

歳暮

ゆく人のかはりゆく年月の別ぬる人そ惜き

恋

初恋

顔のおもひはしめてさしあらはしてこそ恋あるゝ

忍恋

いかにせむ秋のよの見ゆる秋の風に猶もまさりてこそ恋

初逢恋

深くしめしむしうそ思ひもみ海ての契ありけん

不逢恋

さらにそのおもひのやみに逢ことかたくや海こえ

後朝恋

海こなたの海しもやりのなかくもゆるる種との花

逢不遇恋

さてもいつまておもひそめぬることのはなれてもはてはさきつかへの

旅恋

時分あれはなみさ川京の都の人の心たれしや

思

つかひ炉はみゆる母あのせいしなれきそまみちてなくとめ

片思

是もとれ心流してさそふなかりつぬ人はわすれかひよ

恨

夕霧くれて露涙く草も風からてもみたつかなる花令下二

雑

暁

さひしさは八声鳥さへて月さへさ海くまこえの夜

松

住吉の神さひはてて松風に聞く人のしるしなりけり

竹

呉竹のよさえよ世は風のたつ八千代竹の外のちよ

鶴

かしこの津平よお庭の君か鶴そつまに住むの雲に母なる

苔

いつのまにこの庭の苔むしてまさしくあらはれよとさかゆかむ

山

世の中はなかなかに鶴の煙をたちのほるの山のひとつ

河

たつた山わけし鹿こそ身にしみなもと川の紅葉のなみ

野

よしさらばむさし野ゝ秋の草ぞよき春はやよひのしのゝ紋八

関

旅ねする不破の関屋の板びさし時雨もるよの袖の月かな

橋

かげやそふむかしの跡のつきせぬ橋ふりてもつくる春霞の秋

海路

りしかまの浦よりもふね出して遠つ沖(?)まで見わたせる

旅

あさぎりの深きかたにや今もそへ雲のかゝる中山

別

ひとつ涙もしらず別れしゆふぐれのなみだ

山家

岩の戸のあとも絶えし人をまつ山の奥

田家

秋の田のかりほの小山田に庵をかりて

懐旧

世の中とかくれ住みしむかしの事をいひて恋しき

無常

あはれ世はかなき秋の夕暮

あすの身のいかならんとも知らで今日の別れかな

述懐

こゝろよくもうちきく声も世にいとひやすかる
君ゆ心の花咲思ひ出つゝこそ民ふかうへいかなる 説
都にまよひのこゝろ山にまよふかなしさわか
ほかに思ふにしつくしてあやの妙につけ
くらの石ゑに傾舎のしるしのはるかにみえぬを
ひたすらの心さはりなき修行にをつけそておくひ
かなしき今の世のなかのさかひ百首よて
みなひとつ山をのかたよりのこゝろえのつよく
されば御ためにこゝろよせんやといさむると
和泉式部あやうく思ひすてし

しき歌らしめく御製にて堀川院の百首に
我よりのひとゝせくらべ清しのみて
はかなのこゝろはそれそくりかへりきよくわ
つまのはかなきいそきのかなれはいかなる
いのちのかゝりよ寿二百日しかもの時このの
身百首にかけておやつなりつたるかゝるき
つけて葉の心にうつのかつとよ露文から
梅くしてあらそのかへ修行もよめるかたの
よきのしかなれて扉のかくきて見る
みなうかのうきみわれしらぬのゆかり
人くらのいやそて法の世の中のかはよ
せしやしまるさるうちいの百そらへかる

うたまつしれるをあれのひかり給ふ闇て
備へれせ人〱おきさそてきたく
とまりし十二月十日のさるのときばかり
すなはのむすのいよいよわりすてにけり
されりいまうけくれくはせよくこゝて
よみそて女のかゝ梅くへのよしゝ女の
かなしのれしにあひかれし給はく大明神
乃すく梅れのかへしとそらつくしとめて
うつせのちらするとうつしりあら拗れく
さてしけ百首乃名をよ早京・房・瞻乃
百首をよみつけしくしき　拙房しゆめ含

詠百首和謌

元日立春

年のうちに春たちむかふ山人もまたぬにきたる春をまちけり

並結子日

君かへんちよのはしめとけふひくや小松かはらの子日なるらむ

霞隔河舟

いつ桜はしかすみ隔てや波の上に見えつゝ舟の

雪中鶯

鶯のはつねのこゑも梅かえにわか雪なからまつきこえけり

独採若菜

ひとりのみつむ野のわかなかけてのみ人にしられぬ友とみる時

梅有遅速

梅ちるこゝろの梅すてゝうくいすハ咲そゝかれなからも今ね

二月余寒

竹のはにむすひしまゝの雪きえす山桜ハまた梅の余

早蕨未遍

村々のまた霞わけはてぬ春ゝの下もえの早蕨

桜花盛開

吉野山みねの白雲うつろはて花の盛にゆきそきえける

遊覧春錦

都人のみさかりはめてそ錦なれ…を思ふ春の[illegible]

聴帰雁

こしの山こえて帰るのかすみ行雲の上にて秋を待らん

眺望遠島

夕くれに何人かねになかめにや…[illegible]

蛙鳴苗代

春の田のかはつなく水の苗代にたつらん蛙かなくなる

春雨桃花

春雨にはなさく宿の桃の花のはなの色や昔に思ひやるらむ

杜若浮水

杜若のゝけしきの色もみなそこの水にうつるらん花にそかはれ

杜間菫菜

すみれ草色もみなれぬ…さくらんけさも見しより春の野

款冬傍岸

さゝなみやよする岸の山吹さくらんかはつなく山吹の花

樵路躑躅

山人の折手は咲たる花しみの中や手折くしつゝ

藤花初逢

咲そめて行すゑかけて藤浪のかゝるはじめの色ぞ見えける

惜春似友

惜春の心の友の別かな人まつ山の春の名残を

夏

貴賤更衣

けふの衣の袖の色をたれもかはらぬ春のなごりを

卯花繞家

卯花の咲てしるしの垣ねかな雪のみ花とみえつゝ

水鶏何方

さゝふけてやよやたゝくはたが人まつ戸口なるらん

郭公数声

おりのへて鳴くや五月のなくに聲をば待わびつる郭公かな

沼辺菖蒲

年毎にひく人まつのあやめ草水の底にも根はふかき哉

雨中早苗

小山田の流れも水をせきとめて早苗とる袖やぬれまさるらん

高樹遍渉

新樹の中の枝にかゝる蘇峡の林花の名残りにのこれる

久恋瞿麦

あはれ我が床なつかしき撫子の花の色こそ見る人もなし

蛍火過籬

夜もすがら籬のむしとこたへつゝ飛ぶ蛍の光みえつゝ

深草稲荷川

[illegible]

夜々照射

[illegible]

馬上聞鵑

[illegible]

近見池蓮

みちのべの池のはちすの葉にすがるつゆはさながら玉とみえけれ

泉宿暮栖

山かげの泉の水にやどりしてすゞしき夜半をあかしつるかな

家々盧橘

いつのまにかをる袖のむかしをしのぶらん今の橘にかをりぬらん

秋

風音秋使

荻の葉におとづるゝ風は音ばかりや秋の使の秋をしらせたり

庚申七夕

としに一度あふてふ星のちぎりもやむなしき秋の夜半にこそあれ

萩薄露深

のべにおく萩の露のふかさはすゝきのもとにこそしれ

女郎花交墻

女郎花かきねにまじりさくからにあだなる名をやたちぬらん

刈萱乱籬

かるかやの乱れて風にみだれつゝ秋のまがきにみえにけるかな

蘭香薫枕

紫宇の枕に白きや錦ねはさよあかりの濡る也

砧聲驚眠

浅茅か宿の枕にはきこえきぬ夜の砧の音哉

孀婦浣衣

ちる衣かけしよるのつまにぬれそむ人さ風まだ今宵や

孫兒開簾

山さとの霞のまに人とふ孫兒の簾のすゝけたるかけ

雲間初雁

つれなくも友やさそひて初秋のそらかけるかりの声をきくらし

淺茅分露

ーしら露のおきかゝる浅茅かそての人の袖ぬらしもあへぬ

暮年聞鐘

ゆふ暮の外に聞ゆる宿の入あひの鐘の聲やきこえけり

隣家槿花

くれなゐにのほる朝かほのはなの色にそむる

庭虫繁遊

ひろき野のつゆにみちたる虫の音のきこゆる月の夜

湖上秋月

石山の雨やくもれる月の夜をすみわたる比良の山風

擣衣聲幽

つらのうらゆきさびしき里の秋のよに衣うつ

虫聲非一

もろもろの虫の音のたえぬ夜の

菊花久久

紅葉しらぬ人そ宿白菊に宿の夕かへてみゆる

雨後紅葉

かみなし時雨もあらぬ紅葉の夕に後そそのしみやけり

海人惜秋

みるめ刈る海士の袖に寄るしもの鳴かきし八秋の暮かな

冬

閑居初冬

降るみ―紅葉の散るにけり物さびしさの

庭草寒衰

あさ乃庭のあさゆふに霜とそかれにけりさみしけれ

草木の同じ寒さに

すみなれぬ宿の冬をもしらしく霜かれし小野の山さと

雪朝眺望

詠やらんかたもなつきぬみわたせば雲も雪もあとなし

ふもとの里も満つ

みよし野の山の雪のあしたの松のつもりに

古渚千鳥

ひとしきり渡の浦ちどりの友まよふらん波の音

氷閉池水

池のおもにかたまりぬ氷にとぢて青羽の鴨もなき

水鳥浮波

おきつ白浪のかきわけて遊ぶ水鳥

網代聴逸

さ夜ふけて宇治の網代に宿る人もしらず川瀬の

桂峰神木
ゑのえのとゑの嵐にあらき木からしふくあらし吹さき
鹿島帰路
みのりのよ朝きいそくらせ人々きぬきをきの名
遠近雷電
鹿島の中さりのなかすりおれからの縁ほ白ふ
懐妊三子と
くさ父のあきり人ゆめこもさまよ夢をみしめ花桜
玉節兼姫
山女子の後から流まりてかゝるありの人との
除災佛名
餘るそ二世の佛のみか我さくとゆきのと御座

悪
老子神変
くし神の変を人しけ給にみ花の枝てさ伝へ
母子縁通
ひとし里のあそこりも門通りつまれふしやと
利不盈
まれきのあまの所りらぬ河なさて人あらはみなを
鐵輪変
おりはきやかにりよから秋に仏に人にあらそ人
歸宇意
ゆりきてよくえ海のあきまに光てぬめぬて半絶する
後生悔恋

めくりあふ末のちきりも頼まれす絶てつれなき人のあらまし

堺外同恋

あふことはさしも袖をもかけし身と夜をかさねてや旅の宿

等思両人

いつへのひとりゆゑにもあまた思ひわかれし身にもたゝ

尋常片思

こころこそふかきのなみにおもひの見えしさ

人伝恨恋

こしかたの風のつてにもきこえぬはあらましの言の葉

雑

暁見漁舟

鳴くや千鳥あまのうらかせのよする波のおきの

洞前古松

苔むしていくよの代をかさねたる松のみとりの緑

窓前栽竹

ちよふかくまたの節よ植て竹のよやこえ

苔為石衣

山川のなかれ久しき岩かねは苔の衣をきせぬ

仙洞鶴多

君か代の千とせをかさねて松の下鶴のこゑも

積山猶奥

吉野山ゆけはや秋のおくゆかしくみちのしるへ

白鷺立汀

夕されは河風のたちの乱て鷺

野亭聞鐘

いりあひの声もひゞきて庭に見ゆる萩原の露やおきまさるらん

秋色関路

足からの関路よりさへ越ゆる月は清見か関のあきそへて

行客休橋

橋のうへにみちゆく人のたちとまりかなたにもやすむなりけり

海路月晴

みるまゝに八重の汐路をこえて来て月ものどかに沖つ白波

霧中風吟

きゝみるに都のひとは霧のうちにあけぼのゝ松の風

遣唐使餞

わかれゆく人はまたくもなかなかに見ぬもろこしの海やまを

山家送年

やまざとは送りむかへてことしもまたくれぬとしのみ

田家老翁

しらずしてたのみにかゝる代々をへてわがたのむ秋のいな穂に

社頭祝君

三笠山松の村立ちかはらずにみよをいのりてきみが千とせは

寄語故人

いにしへの人にまみえてかたらはゞ昔のことやとはまし

深観無常

ものおもふこゝろゆゑにや世の中のはかなきことを見つゝなれ

山寺懐旧

おもひいづるむかしもさびし山寺のかねの音にも秋風ぞふく

聞法述懐

法の門に入ぬるからに身をしりぬる世をはいとはん人のかりけん

文治三年十一月廿一日詠之

自九条殿給題与寂蓮禅門相共風

吟頗不宜詠之

一日百首 十題 但二時一點間詠之

花

はるさめのそほふるまゝに枝にさく花にはつかし春の山風

桜かりまてとはたれかいひし山桜さそふ風やまたれて白雲

九重の人も春にはなりにけり吉野の山に花をのこして

つれなしと散らはすらんと吉野の山の人の心にそまつ

さそはれて山桜まつ人そ待らむ

みよしのゝ山の桜にたちまよふ人もすみよしきよき山路

春くれは桜の枝に風ふきて花にたなひく霞こそ山

ちりぬとも花はさかりの春の日に風にたくはへて花

あさなあさなうつろふ花の色をみて花にそなれ行

おもひやる桜のいろもあかなくにそめてし春は

郭公

年を経て聞とも飽ぬ郭公まつにかたらふ山のをのへに

しのひ音を聞つけてこそ郭公さつき待まのものうき

郭公なきつる方のよそめにも秋風ならぬ身にそしみける

ほとゝきすたちはなかほる郭公花橘の枝になくらし

さしつゝむ梢をわけて郭公さそふつらさを

かた山のゆふくれかたに郭公声きかすしてやみぬる

をくらのふもとかけ鹿のこゑしてこそ萩原(?)か
なかしつゝゆかりの名のみして鹿のなく夕ぐれのこゑ
人しれぬものおもひやなく鹿の音にわかれしうきにたへずも
わかれのなごりをしのぶまくらにしのびのほかの萩の下露

月

秋の夜の月はさやかにてあかずやわたしのこゝろにもかよふらん
いつくにもかくさやかなるひかりをしるやとて秋山のふもとの
なかめにけるも秋の月とのみこそおもひて　のこるゝ
あるひはいりやるもいさよふ山のはに見る月影のしるゝ
秋の夜のさしくるかたのやどの月しるらん月のかげ
月影のさしくるかたのこゝろまでもすむかな
いつくもありあかしのねさめにはみるに玉の井の水

雪

吉野川岩よせ浪くちてまた鹿みえぬ八月のころから
月影のさしゆく末は岩がねにたえず庭の音を
ひさかたの空の浪まに月さえてまつの木の下
ひえの山は雪けの空にみゆれども都の人は何とかもし
あはれにも雪はふる山里の庵のあさけにけさの袖
庭の雪は跡のかたみにおもふ人もなきにけり
雪にふりつもる木の下にみちもなくて
去秋の野辺の草葉にふりそむる雪の山里
人もなき山にこもりて雪をきく人のひかり
雪ふりて山のみねの木々も雪にうもれ
冬の雪かつもりてたえずふる雪はふかき雪のあしたかな

みかりする山ともかしきかりてもあかり穴さくのこ
みうちのうくもちむちうそ秋も霊大陸のもまれにや

鹿

人しらぬおもひは世にふる鹿の峰し鹿をあわれ鹿しらなあ
不ぬ夜の日本かすか嵯峨の山とをのりかなくかなしむすみかね
君ゆへつよしかわかわしれわひ袖てもの露りとかりくあかれ
寝さへ志るれ代山さらぬしもの影もくれ枝もち露もちて人わけて
夜深こゑもあはれてしき音おもす山やまもしろま山の月
見ゆへよいりもおりふ高い幼もわかかりてに志ら出まわりと
妻こもれしむれわこゑとなかめけおりひかなも君をしのひ
鹿ふ高きてかくよそなの夜よなくおもひハ秋の山を
君恋ぬ人よゆくやそわけわけ月ハ高みはにをしるや

山のはにつきかゐかりなくハ夜なき音かなくよいくらも夜半よさらに

松

千年ふすそ緑の色の松のみとせはよ君がいのちくそかこん
昔人そめし神代もしらすよ住吉の松のあをみえとれの花
よけく浦の松よ内けかりくとれみさとん人ようくつるかふ
志るよ待くしかくこの人よりんを女をし庭ひとかしはや松葉
山の松とよりとも時をとも人をとゝもひとかふ松をよくおもふとよさくゐ
おもひみかおけるにみれて地のけいにちれ浦も松の村立
たゆりれに松の松くそゆれれ緑あらはにかおもひそ
海人のすむふ世人みかよりつれしはより高き松か浦路
そして山に松か緑れにおもひもむ見えぬ松のめくよ
千世みかとしけそや緑つかんなつの高れかきてとにいさみの青

竹

冬くれはさひしくもあらし霜をさへはらひもあへぬ竹の葉かせ
うき世のそとゝおもひしに庭に竹うゑたるのしくなれ
又庭くれはかしけれは竹のしもねくしおもひの村たちぬれ
竹ハうそくのくつよきもしくかは竹のこのうちよそのにた
霧ふかき山のさとはさひしからて竹の風そいさよひ
かは竹の竹のさくまよしけれとこそしけ竹をのへ人をそしる
竹のこきたる人のともをたくなれ竹のなかよしいかにも
河竹のおきふしかよふてやまてくひてうき世まこそまけれ
ゆふくれしそ庭の竹の此葉にかくれの竹すくおもひくゐ
あつさからまよりもあつまの竹ゐのあかゆへしてみすかけれ

山家

山さとの家のおもかきに花あれは庵つまのこゑそ秋かせそ
山さとは家つゝき竹の梢あらひしくへ下けにさらくのて
都よりもたのみし山里よりも海きはしにそなたへかよふ
竹のかけに住しひとかたしまちかくさと家ハ左なる里
山さとハあまさひおもふすれなくおもひかみちひはなき
人の山への心ひろくも此世のはかなくらみす袖ぬれて
あはれよはぬれ衣のはれぬはかなく人のすみにて山への
絶人の心の見はてゝそれのものゝ此松風の声
思ふこと人をはよそに山のこのはにかくれぬさきしろ
おもふそれはもしなそよへなくまよむすけのみよる山

海路

あらあやうのさへなそくきまるもの旅こゝろに浮浪鳴山

よ海の海人のあくりの旅ねして浦さひしくもみゆるかな
うきつゝもまたかゝる身の程にそへてよそにしも松風そしむ
こゝろあてしとは奥つまゝなりぬれん岸の松風あきもよきかな
道てたりぬあはれのみ風さそふわれにつくるのはなそよ
塵に舟おきは雲くつて山の露も衣をつみて月のかけ
あま人のゆふなおもぬ別れは我衣袖よ波とまくらしに
波のあらや松のあれしまやうしなへて外なら波ふる文字
夜の世は志つまんしとおれりすゝ遠くよる海人のやと舟
おもふくは庵冊よ家てゆんはちのそまゆつゝして

述懐

あまりて俄おもふ人々をなてえんぬるさまは袖そぬれける
あまたとせひとめぬ飯のいつれ八ゝ南ふかゝ
世中といふとはんへをもの飯のなさくそし

何事につけてかはつらき世にあくかれとはいふ山のはの月
松のとの結ひさゝぬる庵にも濁りに染む袖あはれかな
人こそよみかる柿の衣ぬきそうて我はやけの契りのかな
此さひ絵まきくりて人に越てゆく法の光
山のはれはのみなゆ袖のうちの物を長くなをあけはてゝ
志ゆくまつかたむやみ雨はし日あけの照さはつかせへ
ねかふなくはとそりね暮ぬるあまりて十夜ふかへ人あまたふゆ

隆闍和示詠百首於一日之告来語仍
誠企風吟之間午終又未始之右筆則
酉一點書付之
建久元年四月八日詠之也

住吉乃神にわたして出遊ましゝ時ならしてちる云の寂
ゝ国よ十五日のもしくはしやこ時ましてちりすくめく

宇治山百首

春

立春

岩川乃底にも春や立ぬらん氷の下にひゝく也

子日

年積へて千世のためしにひく松を猶子日にひく人

霞

しほ浦の煙のしるへつゝむ霞そ春のけしき

鶯

鶯のなくや山乃春乃曙よ初音きゝつる宿乃しるし

若菜

のへよ初くさつむ沢乃縁みか春あさみかな若菜

残雪

春乃日乃さすかにもまつ残るか雪の杉村

梅

山さとの梅乃白ゆひしかけてにほひきまさるらん

柳

風吹は春雨川原の柳みなかせ柳乃糸ちるとしみえ

早蕨

春風をまつて高山乃早蕨は折立ちてやりし初なま

桜

わかゝの奥乃雲かゝる峯もはるかに見えて山桜ちる

春雨

ゆてしくん物なりけるとて人に見せて春雨ふる夜山里の草

春駒

あら駒乃おもひかけすも野をかけて駒なれそめし春の野のまよ

帰雁

見乃秋乃月夜之花ゆる人あらむ春乃空よ別るゝ

喚子鳥

かゝしゐの岡乃かくてはかけりける山ゆかの夕暮の空

苗代

山かけの水田乃小田乃ひとすちにしめはへて行末もかな

菫菜

あさ乃春の野にすみれ摘む人の花乃雲井に雁かへるさとみ

杜若

旅人の袖もぬれてこそ行河乃八橋見れは杜若かな

藤

さくらはちりてのちさく藤の松乃梢よりかかる藤波

款冬

立田川岸乃山吹咲きにけりかけて水代白波

三月尽

わかれゆく春の人の情しも春はなきみかな

夏

更衣

花乃色のわかれ惜しむ衣かへさなく

卯花

かきねとしみな卯花のさけるころ月には浦もせていはぬ中の

葵

年ほへつく神よ志てすひしりつゝ葵よつさすほくら哉

時鳥

夏乃月光ハ秋に露さえて郭公なく山のはにたゝく

菖蒲

あかねや引しのくみかふきしあやめ草のかをよそにかほる

早苗

小山田乃をしね乃苗乃ひくよみ田かへしめもはるさみたれ

照射

くらき夜にさひしく火ともしほるなのへ夢路かつくさ哉

五月雨

さみたれはあまのひまなきよもすからむかし乃谷の音の声

盧橘

昔おもへはなつかしき梅の花咲宿乃袖乃思ふ人

螢

夏の夜の涼しき風に螢宿るかと川辺の松の梢

蚊遣火

賤乃屋のかたへにはさうつるかや火まつみ月よりさかりに

蓮

濁りなき山乃蔵乃法といふまても花ものちの身を人そくる

氷室

夏ながら冷しき室にのこるらん氷もくみあへる岩の山陰

泉

花ほやむすひし水よ汲るゝて今ハ秋ある松の風

六月祓

月清みつきのしきさして六月祓へしてよりて秋のこゑ

立秋

すゝしさくものみなみとおもひしにはやめぬ秋乃色あり

七夕

織女乃ゆふくれまち乃あひ見ぬ秋乃衣ハ夕くれのそら

萩

咲のけふ白つゆの身乃ちりにむすふ萩の花の色

女郎花

とりつゆにぬれぬれ姿しくみなししし人の袂によせし

薄

しほれあふ穂にいて招くと見えて秋のはなの袖の夕まくれ

苅萱

乱さる露乃やくれ袖によ萬代乃心はえし事

蘭

ふしの袖乃露衣あけ白へて秋の袖の香あれ

荻

夜毎にひ吹ん風にそよく荻乃夕ハ

雁

中々月夜のあく秋の雲に飛ゆく雁の声あり

鹿

さ田乃契せぬ宿ゝ住人は秋乃哀をしりてこそしむ

露

のへしまこほつる秋乃夕暮とさすかに袖の露しらしつ

霧

詠しはるゝまもなくやらん山里は哀に深く霧は都へ

槿

あはれなる朝に咲て槿はたむけてみる露をおきて咲む

駒

月影は今逢坂の関のゆかりにやいつありしそれは人

月

秋乃月くもりぬしもなかりし夜とて訛をしみゐたらん

擣衣

衣うつ音はまよひ偏しるへ一もよ風ゝ音は風にゆられて

虫

おりしもそ枕をと粉山里は声もまた虫の音すなる

菊

山川によくに菊はなかしとかれぬゝ人によるや

紅葉

うつしくも風はたゝ吉野山秋乃桜は紅葉なりけり

九月盡

さそひよ秋乃哀にあらそふも又くれに別ぬ

冬

神無月

冬はれ冬によもゆめしつけ果て時雨ゝく木枯のくせ

時雨

くれ竹の山本くらくかきくもり打時雨には道もしらすも

霜

草の枕霜に霜そへてさゆる夜半こそ旅寝なりけれ

霰

笠の上にあられ音して旅人ハ道のほとりの宿をとふらん

雪

冬の日も暮れ行野辺にふる雪ハ道もしられすつもりそめけり

千鳥

月影におく浦波の友千鳥行かた八松風にたくひて鳴なり

寒芦

みなと江に葉も枯はてゝ冬ふかき霜の蘆の

氷

波の音ハ夜半の氷にとちられて楫のおとこそ聞えさり鳬

冬鳥

波こえの浦の浪間の沖に中の鴨ハ人の夢をさそふらん

網代

月きよみ宇治の網代の夕波ハ松の嵐とともにさえつゝ

神楽

庭火たく煙のうちにてる月の影もさやかにすめる神の声

鷹狩

みかりするかた野の村の里にかりくらしつる鷹の羽

炭竈

あさなゆふなに人の世ハ大原や小塩の山の炭竈の煙

梅風

秋すのこひ乃下まて消ぬやや思へとおもぬ哉らん

歳暮

いとひつゝしられぬくよつりの雪ふまへまひて消へ侍らん

恋

初恋

いつしかあつ涙と時雨まておもかりしむら紅葉

忍恋

今はあし袖乃涙の色見えておやまとゝ人は問らん

不逢恋

ましてく涙乃世をくちさわさけて恨をやうらん侍

初逢恋

人しれぬ心のはれぬさ袖てもまことに君と逢ふ一夜哉

後朝恋

明ぬとて別れ行人の古よりくるの涙しそと鶏は誰さん

會不逢恋

恋しさの志らぬ涙乃しらぬ袖乃へしかはさりし袂

旅恋

まゐれにし日数いくらは数ふるよりつゝ旅乃床

思

ますらなき人乃情なきよりてかゝる世とはおもはれ

片思

ひとつゝまにしよ君こそおもひしらぬ身乃涙をせぬやな

雑

逢事のかたく結ひしえにしもてこん恨のきわめなかれ

暁

志らしめや八聲乃鳥乃聲さへ関守さへもとめかねん

松

住吉乃浦乃松枝よ吹ためて波よりもます松の秋風

竹

末かけて久しき代々の竹乃葉のみかけし君とおもふくもかな

苔

みそつくみふるさき山乃山人ハ衣乃苔をけふ衣り

鶴

あしまに世なれし千代乃年々をかさねても和歌乃浦の鶴乃[?]

山

世中よ山てふ山ハおほかれと山ハ比えの御山とそいふ

河

宇治乃川ハ淀乃わたりを落きて末はつゆるへき[?]

野

春と夏とみてもあかぬハむさし野のにはよき秋乃夕暮

関

あふ坂乃山路に雲ぞ立ちぬれて関と関守のえぞ知る[?]

橋

くもてなるかりの橋乃絶まよりゆきかふ人の[?]

海路

ゆきなるゝつくし乃磯さへおしやの黒松乃夕風

旅

東路の草の枕の秋の哀をハ人もよしとや見る所の月

別

こゝろの旅の衆とこそは言さても二度人に別ぬるかな

山家

山の奥に住人よ見そやも山里に住をはまし住をはらしき

田家

夕風にいなはの露の乱ぬる袖にもしほつるかな

懐旧

こよひかく昔の事を思ひつゝ袖にも行末乃思ひかな

夢

大方の夢とゆめとに思ふ身の心のゆめにさめぬ

無常

夕露のかゝる浮身の程よりは夜すから

述懐

世の中を思ひすてぬるなけく身のものを思ふによしなき

祝

君か代の千とせの数のかきりなき松吹風ハ

少人相語云可詠吟十ケ日百首
仍始自建久元年十月十二日各以
風吟大已丸雖不堪頑質極被疏
之年同廿八日令詠畢号之字治山
百首為勅山家之小草也云々

勅句百首　一時之間詠之

春三十首

春くれは山の岩ねの氷まてとけてそ谷の水のおとする
くもゐにも子日の松をひく人のちよもかはらぬ春のためしか
春雨はふる柳の糸にぬきとめて山のかすみもあをみわたれる
都にはちる花もなし山里はさかりすくせる梅の立枝
梅乃かを年のうちよりとめて春の七日の里をたつねん
雪消の山へにも春はしられけり入日のかけのかすむ遠方
袖にほふ梅の匂ひをたよりにて風やふきくる春の夜の月
春風に柳の糸をかけそめてうき世の中にたゝよふ心
東路や春のあさみとり蕨も萌る野へのけしき
山里乃夕の霞に吹くれてたえてひさしき山の春雨

桜さく山のかすみに入ぬれはつゆもわすれぬ人のおもかけ
飛鳥川ふちせもしらぬ霞にてたれもかはらぬ春のおもかけ
吉野山かすみの桜花ちりてのこるかたちのいつかわすれん
山川に花の香ふかき木のもとやとりあへすしてうつる春かな
山里乃かすみにまかふ花の色はなにかはちかき風のまにまに
桜乃花のちるをおしみて春の夜の月のかけにも見るそかなしき
年へても花のいろかはかはらねと柳の糸そ春はみとりに
いにしへのなさけもおもひやる春の夜のつきもかすみの山のはの月
年へても見る人もなき花のもとに我もいつまてなかめ暮さん
見よや春の花ちる山のかすみこそ夢のうちなる人のおもかけ
都人のかくなき心の山の名に花をもあらし春の夕くれ
春乃野にかくる日かけのしつかにて花も咲なん春のあけほの

あつしまゝ春乃世の花乃さかりに春よ名にたちくれの花
吉野山よしや人乃うらむとも咲花乃かけ
あたの代は春にまちわひ時なりし人の世をかさらて晴の花
さくらはめの柳乃糸のみたれさけてむ乃かやとらまさきは
山さとはやよひ乃む咲きらんせ人乃宿におもひはあら
春乃雨よひとよ春のつゆくもる梢をぬれとこそやあれ
山さとむすの乃しまか花ちるさと蛙なくこのその夕くれ
花乃ちる紙乃ちりまかへはせと聞ゆすむ春乃色の夕くれ

夏二十首

ちる花は山のかすみに千歳乃色もゝすゝく春のさきくら
出さしよ卯のはなさく垣のきよくあおくきこし聞は夏の人の夜月の
年過て山さくら卯のさくら残る花もめてる雨さらに

さくら咲宿の梢に雨ふりて山郭公なきてすくく
やらしなさ月乃ゆふへのつまなれくさのはらにおもふさく
よしの山思ふ乃夕くれ梢にさくらめと散を見る
ワかやとは花橘乃ちりかゝる昔乃袖の香にそにほへ
ロ枝の雨のしへの宿乃五月雨に河とや奥の方へなかるゝ
大井川早くそ瀬のよふひとれ霞むふかき夕闇乃そら
山さとは鵜のそらおほつかな霞のそらはみえねそ
くりひろけ山の里くれの五月乃雨のかゝる乃河まて
梢さん蝉乃やまふかき夕ゑてなつさなきつる夕月のそら
夏河乃おり織の牧をみよりてき山の夜の雪
ワかやとの池のはちす乃葉の風にさ乃あさひ
虫の音はしるこそ秋乃人夕くれ宿の夕ゆふくこそ夜はそれ

あらさみの我よりのゝうへ秋乃夕露てらすも色よ
ワかやとの池乃蓮よなかけはいはゝ月は久しき人こそかへらむ
てらさむといふ山高き乃神山にの端しらさへ夜かゝる
さゝなみや神のまにはくみそめて泉の秋風ぞ吹て
あれ行宿はいさよふ乃ちり川風は秋てしら夜寒かな

秋 三十首

秋きぬとおもひて風涼しく成めきや我か荻乃葉ぞそよ
待えしは七夕つめにまさる人まさにあらしや我人乃たえこそすれ
宮城のの小萩は露にぬれ秋乃花は雨にもまさらすめかす
秋乃野路の行人は今さらに曇かや月ひとくらむ
雨の雲をかけ秋乃野原を吹きし風は今宵ひとつにてこそ
よそ乃夜てぬ月たてよそのに吹風は袖よ露

さそふしも萩乃上風吹まさるふる宮城野露まさる人
秋乃野にかゝ夕に行くは野原に萩やまたかくれぬらん
夕風に秋乃雲にさそはれて鳴音の人乃夕そ哀れ
秋乃田乃穂に露かにかる風の袖に涙はみて我袖をそしたかむる
いつよりか晩に聞く夕時雨や雲たちぬ月の雨まさる
秋くれて秋乃雨さへ秋乃秋風に秋乃いそ秋にまつらぬかな
哀とていろみしやとる雨しれのの人乃廉乃かたちかな夜
世中はさくてはうかれさまよりて世中ゝもしるなれ
些乃さは問たちの人は物やまき月をさしてこの月を
ちりはの乃影をちらしてみつのかけより遠くまちつかは
人乃乃にいかひ乃ものさはかしそ露の雨
いのさしよさしまかし人言乃ことをあやうく遠き昔人

さえてきくやまのはしらにしもかくれつゝたれ〔？〕し色もなくくもるよ
あふ坂乃関乃志水にうつりてそ都よりけふ〔？〕ある望月乃駒
秋乃月ひかりはさやしもかくは山のはしもなく出にけるかな
いりぬるをまたてそさかる雲乃端〔？〕吹なみたかなみつくらん荻乃上風
あさちふ乃露よりつゆにおきかへてそ我袖をやしほるみる人
世中にいつまてのひはかきりなき擣衣乃人乃まつ山ほとゝ〔？〕根〔？〕もなく
やさしきにきこえてなるやこほりにし人夕暮にしも松虫乃声
いかなる乃花はさくらにそちりにけれ人乃ためしはなく
神無月〔？〕秋乃時雨乃かゝりけるなからおもふ露はちる人
しらぬくも中に白菊は花よとくまちしもみれ
身にしむ山風のそてよりもみちの色よりそめけく
露乃おくしけのひよりはまつ人にしも秋乃夕暮哉

冬二十首

神無月数おほくなる哉そもふるし木枯乃風
山はみなみな〔？〕しくなりなり乃村雲よのみとさへ時雨つゝなれ
ことしもなへての山はさひしく君乃みかさゝつくらむ乃紅葉
冬かれのさひしき野のおのつからあはれなるにわか身さし露
おいにはさ〔？〕聞ゆる人よあはさてけふのためのこのは
しくれあはれ乃秋つゝけ霜をしよ冬乃葉は見へかたき
さむき夜ふけてみやこ鳴く〔？〕とこそ雨よ浦とも松よ風よ吹まさる
むこうの谷乃おり〔？〕ふてさひしき山ふかき乃見え山への里とも
世中よたちさらむつのひかさもさむきそらしきよ野の山にいれ
水の底の〔？〕字治乃川風ひきそてふひとよ渡る守網代乃漁火
あらし川乃そしもくの浪乃風さそみれはいつよふか乃宮乃けしき

由いかつし安の姿ハ乃つまて打向つゝ山吹嵐まかわ
かゝ人ハふかんちとらゝ此袖よ雪あつ夕への姿や
くし龍乃打みさ乃もさ好まそくかし好みの哀ゝ玄れ
冬てよ桜の之てまよ哀や神ハ閑ら人あさくてれ梦
冬かれの姿乃れ夕風吹のまさめてこれしおこ哀に
春ハ文山てわいつち雨よ又ハ松ふか織乃のへかくし
分かつしまち書のまあまなわかくて宮かゝよ身よ一つかつ年小
庭竜乃絶風流は分かゝ山わかしよ乃玄花乃を

建久元年六月廿六日自未刻至未終
女法一時間詠之仍可謂一時之百首其
間猶与人有閑談事矣 柿峅百首者
定羽林勧進シテ 後大徳相共詠之 其後道

題於際阿闍梨許之 仍此闍廿六日午
終束譜則右筆終之篇於一時半一首之
句之内勤句也所謂

春三十

春されハ（文詞句） 夕よ乃霞此 才二 庭に河 才三 鶯さへ啼
つくかくれ 雪きえぬ 梅乃白よ 春部乃
山藤おほき 夕への霞 さくらちれ さくらの鶯
のへわたり 前渡ふ此 よふこ鳥 めしのくれ
立夜明乃 もみれつひ みそれ乃山吹 春の雨の
梅はなれ あらし庵此 うふつき 岸に関
春霞の さかへ乃此 山乃ちれ はれ
鶯ちらく 春の霞

夏二十

なつくさハ　ゆむらしね　おもひ草よ　山ゐせん

おもひあへ　さなへとる　くれゆくの　五月雨よ

蛍とびかふ　水鶏なく　ころもあふ　蝉乃涼しき

やりみづよ　扇乃風の　夜半乃しも　おもひ入乃

池乃蓮よ　小倉山　秋にもなる　夏のひぐらし

秋二十

秋きぬと　織女つまよ　秋ちかき乃　女郎花も

むらくさハ　くる乃風　萩乃花　なびく風

ひくあさし　月ごろ乃露　秋乃田乃　鴫もなきら

秋風ハ　尾花乃露よ　荻乃葉ハ　くれ乃乃

の人乃白雲　夢さそ　さと人　望月乃いろ

秋乃よるよ　きくある虫も　ほのぐと　の人乃たつ虫

松虫乃声　いなつま乃　秋乃野分の　たつきくの

おもひ露乃　秋の初を

冬二十

神無月よ　ちりくるは　たく霜乃　霰ふりなり

ふりの白雪　ちらす風に　ゆきふりて　汲らくもて

しぐれ乃よに　雪乃おもて　おもひ乃　しらぬ乃

ちとりなく　くもる雲　網ゆく声　夜乃風乃

浜乃おもを　埋火り　松にうつ鐘乃　としの年暮

一時之宋住吉大明神御知見

社採根林又時之間詠之云〻

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan